Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-23

フィリッピン・プロ・バスケットーボール(調査報告)

天野, 郡壽

(Citation)
国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要,4:147-159

(Issue Date)
1995-07

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001157

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001157

KOBE UNIVERSITY

フィリピン・プロ・バスケットボール（調査報告）

天野　郡壽

はじめに

1898年パリ条約によって、フィリピン諸島の統治権はスペインからアメリカ合衆国に譲渡され、それ以降アメリカの植民地政策が強力に推し進められるなかで、スポーツの分野も例外ではなく、1910年にはフィリピン体育協会が成立するほどスポーツ活動が広まっていた。

フィリピンでのスポーツの組織づくりは「YMCA関係の外人、特に米人によって統制秩序づけられていた」そして「基督教伝導の任務もあった」(注1)という背景はともかく、当時のフィリピンは東南アジアにおけるスポーツ先進国であったといえる。

バスケットボールがフィリピンへ持ち込まれたのは1901年、日本へはそれよりも10年以上も遅い1913年やはりYMCA関係者によって伝えられた(注2)。

このYMCA関係者が中心となり、1913年日本、フィリピン、支那の３国で「極東競技選手権大会」(注3)が開かれるが、この大会でのバスケットボール競技ではフィリピンチームとは大きな実力差があった。この差はなかなかせばまらず、第９回大会まで、日本はフィリピンに１勝もできなかったほどである。もっとも、当時の日本のバスケットボール競技は「一般からは殆ど顧みられなかったスポーツだった」(注4)という状況であったから、致し方のない結果であったといえるだろう。

ともあれ、アメリカの影響を強くうけていたフィリピンではバスケットボールが盛んで、1940年代にはすでに国技ととらえられるほど浸透していた。

現在もフィリピンではバスケットボール人気は非常に高い。マニラの学校や職場の中庭には必ずといっていいほどバスケットボールのコートがあり、正規のクラブ以外にも複数のチームがつくられている。住宅街には住民が自由に使

えるコートが数多く存在する。このコート以外に、路地や歩道にもゴールが立てられており、そこでは仕事を終えて帰ってきた若者が、ワン・サイドの3対3や5対5の簡易ゲームを楽しんでおり、この路上のバスケットボールはフィリピンの夕方の日常風景となっている。

今回調査した、フィリピンのプロ・バスケットボールリーグ（以下PBA）は約20年の歴史がある。全ての試合がテレビ放映され、選手は、とくに若者のあいだではヒーローである。

このようなバスケットボールの根強い人気に支えられ、PBAは年々営業成績を延ばしており、コミッショナーは5年以内に自前の体育館獲得計画発表している。(注5)

フィリピンのバスケットボールの実力は、1990年、北京でのアジア大会では中国に次いで2位、つづく1994年、広島での同大会では日本に敗れて4位であった。いずれの大会にも、このPBAに所属するプロ選手が参加しているが、広島大会の敗戦の理由を総監督であるベルナルディオ氏（PBAコミッショナー）は、『わが国はインターナショナル・ルールは不慣れである。今回の敗戦はフィリピン・バスケットボールが完全にNBAルールを消化したことを物語っている』(注6)と述べ、プロ組織に対する自信を示している。

あるスポーツ種目がプロ組織（エンタテーメントの提供者）として成立するには、その種目での高い技術水準と、それを支える経済的背景が必要であるというのが一般的な考え方である。しかし、技術的にも決して高いレベルではなく、経済的にも良好とはいえないフィリピンにおいて、バスケットボールがプロの集団として成立し長い歴史を持っていることは、非常に興味のあることである。

PBAの歴史や組織そして運営形態の調査結果を報告する。

調査は1993年8月と94年10月の2回にわたり、PBA事務局において聞き取りと資料収集を行い、チームのオーナー会社においてチーム担当重役と面接調査を実施した。

なお、職業としてのスポーツ（この報告の場合はバスケットボール）を呼ぶときは「職業バスケットボール」あるいは「プロフェショナル・バスケットボー

ル」とすべきであろうが、ここでは、「プロ・バスケットボール」とした。また、それ以外のスポーツ用語もすべて慣用的に使用した。

歴史と試合の形式

PBA（The Philippine Basketball Asociation）は1975年に結成、オープニングゲームはPBA Maiden Seasonと名付けられ、9チームの間で試合が行われた。PBAの試合方法は開始以来、年間3シーズン制をとり、それぞれのシーズンで優勝チームを決める方式を採用して現在に至っている。

1975年はAll-Philipino（フィリピン人選手以外の参加を認めない）、外国人選手（フィリピンではimported playerと呼ばれている）を加えてよいOpen、そしてInvitational（招待外国チームが参加）の3シーズンを消化した。90年以降は、第1、第3シーズンでは外国人選手（ほとんどは米国国籍）の参加を認め、第2シーズンはフィリピン選手以外の参加を認めないという、試合形式を続けている。

各シーズンの試合方法は、日本では馴染みの少ない方式が採用されている。まずファースト・ステージ（elimination roundと呼ぶ）では、参加チームを二つのグループに分け、同一グループのチームとは1試合、他のグループのチームとは2試合行う。この少々変則的な総当たり戦の勝ち数によって順位付けがなされる。

つづいて、ファースト・ステージの上位5チームによるセカンド・ステージ（semi-finals）では、各チーム2試合の総当たり戦を行う。その上位2チームが1、2位決定戦、3、4位のチームが3、4位決定戦を行うのがfinalsと呼ばれる第3ステージである。

1シーズンが3ステージで構成されるこの試合方式は、年度あるいはチーム数などによって少しの変更はあるものの、PBA設立以来踏襲されている形態である。(注7)

PBAのルールはthree-pointのエリアが少し狭い以外は、アメリカNBAとほとんど同じルールを採用している。

チームとその経営

各チームは、企業名あるいは商品名（製品名）がつけられており、新聞やテ

レビなどにはニックネームではなく、その企業名（商品名）がストレートに登場する。ある食品会社は、販売拡張を目論んで、毎年のようにチーム名を、自社の新製品名に替えている。このようにPBAのチームは日本のプロ野球と同様、経営母体の企業にとっては、明らかにダイレクトな宣伝手段と受け取られている。

PBA結成当初1975年の加盟チームはToyota（自動車）、Crispa（繊維）、U-Tex（繊維）、Tru-Orange（食品）、Noritake（食器）、Carrier（エアコンメーカー）、Tanduay（醸造）、Presto（食品）、Seven-Up（飲料）であった。第1および第2シーズンでトヨタが、そして3シーズンはクリスパが優勝した。

表1　加盟チーム一覧

1975年	1977年	1979年	1981年
TOYOTA	TOYOTA	TOYOTA	CDCP
CRISPA	CRISPA	CRISPA	CRISPA REDMANIZEP'S
U-TEX	U-TEX	U-TEX	FINANCEING
TRU-ORANGE	TRU-ORANGE	TRU-ORANGE	PRESTO FUN DRINKS
NORITAKE	FILMAN BANK	FILMAN BANK	SUN MIGUEL BEER
CARRIER	ROYAL	ROYAL	ST. GEORGE WHISKY
TANDURY	TANDURY	TANDURY	TEFILN POLYESTERS
PRESTO	GREAT TAST	GREAT TAST	TOYOTA SUPER DIESEL
SEVEN-UP	HONDA	HONDA	U-TEX WRANGLER
		GILBEY'S GIN	YCO TANDUAY

オーナー会社の変遷をみると、76年にはPresto, Carrierに代わりN-Rich（コーヒークリーム）、Royal（ビール）が加わった。77年はNoritake、Seven-upにかわりFilman BankとHondaが加わっている。80年には銀行、保険会社もチームをもつが、5年後の85年には当初から名を連ねていた自動車会社などとともに姿を消している。

91年のシーズンはAlaska（ミルク）、Aneio Rum 65、Pepsi、Presto Tivoli（アイスクリーム）、Purefoods Hotdog、SanMiguel Beer、Sarsi（ソフトドリンク）、Shell Rimula-X、が加盟している。

現在加盟しているチームの親会社はアルコール飲料、ソフトドリンク、スナック食品会社などである。

日本のプロ野球においても、その親会社は新聞社、映画会社、電鉄から飲食・流通会社と変遷している。これと同様の動きがPBAにもあり、最近は、宣伝が直接売り上げに影響する商品を製造販売している会社が経営の母体となる傾向がうかがえる。

インタビューに応じ、さらに資料を提供してくれたP社は、加工肉、小麦粉、かつお缶詰、アイスクリームなどを取扱い、ファーストフード・チェーン店を持つ、93年度の総売上は5,673,985,000ペソで、フィリピン全企業の中では30位に位置する(注8)総合食品会社である。

チームは選手12人と外国人選手そしてコーチング・スタッフで構成されている。なかでも、チームに1950年代生まれの選手が加わっていることは特記すべきことである。特定のチームだけではなくどのチームも1、2名のベテラン選手を抱えている。

そのベテラン選手の中で、1946年生まれのRobert Jaworskiは別格で、"PBAの生きる聖人（Living Legend)"の称号を与えられ、全てのファンの尊敬を集めており、彼の出場はいつも待ち望まれている。

チームオーナーやコーチは「これらのベテラン選手は、戦力として期待は当然ながら低いが、チームのまとめ役や選手のカウンセラー役としての働きを期待している」と述べたが、これらのベテランの存在や活躍はゲームの興味を盛り上げる重要な要素ともなっていると見受けられた。

いずれのチームも専用の練習場は持たず、体育館およびトレーニングジムを借りている。選手のためのアパートや合宿所などの宿舎提供はない。シーズン中は毎日、2時間ないし3時間の練習、シーズン後は3週間の休みをとる。チーム構成や練習条件などは、どのチームもほとんどかわらない。

93年度、あるトップ・プレーヤーの収入は500万ペソ、新人は78万ペソである（いずれも年収。ただし新人の年収は30万ペソの勝利ボーナスが含まれている)。ちなみに、この企業の大学卒者の初任給は、マネージャークラスで約12,000ペソ、一般職約4,000ペソである（いずれも月収)。

年間のチーム維持経費は約4,500万ペソであるが、ゲーム収入（入場券収入とテレビ放映料など）で賄われているのはその1／3で、残りは企業負担である。

現在フィリピンでは、30秒間のテレビコマーシャル料が3.5万から5万ペソといわれているが、担当重役は「わが社にとってバスケットボール・チームは年間約3,000万ペソの宣伝料に値し、製品をより健康的なイメージにする、すばらしい手段である」と語っている。

ＰＢＡの運営

PBAの試合は、ほとんどが、マニラ・パサイ市にあるアストロドームと呼ばれる体育館で行われる。収容能力は9,600人、1992年に建設されたものである。第1回目の調査を実施した、1993年の第2シーズンの観客動員総数は287,733人。合計32試合の内、16試合が満員であった。ファイナルやセミ・ファイナルには当然入場者は多いが、ファースト・ステージでも有力チームの対戦は観客が集まる。人気のないチームの試合では50％ほどしか席が埋まらないという。入場料は15ペソから200ペソで、セレモニーのある初日とファイナルは高く設定されている。

表2　入場料（ペソ）

	ELIMINATION	SEMIS	OPENING & FINAL
3階ベンチ	15.00	20	25
ボックス	80	100	110
コートサイド	100	120	140
リングサイド	120	150	180
VIPボックス	200	200	200

収入は、上記の入場券の売上、テレビ放映料、キャラクター商品の売上などからなっている。収入の分配は、入場券収入は試合当日にすべて清算される方法を採用している。

この入場料収入の分配は、エレメンタリーとセミ・ファイナルでは、試合経費（PBAの事務経費、会場の借用料などを含む）をのぞいた残額の30％が勝チームに、20％が敗チームに支払われ（1日2試合行われるので勝ち負けそれ

ぞれ2チームとなる)、ファイナルでは（4チームが参加）最終順位によって1位から4位まで、40%、30%、20%、10%それぞれ分配される。

テレビ放映料は試合数に応じて分配されるため、当然ながら決勝戦まで勝ち進んだチームが多く配分をうける結果となる。また新加入のチームは、1年目はその60%、2年目は60%、3年目から他のチームと同じ額を分配されることが申し合わされている。

1993年度の総入場収入は40,951,415ペソ、テレビ放映料64,000,000ペソであった。

表3　PBAチーム分配額（ペソ）（1993年PBA決算報告書より抜粋）

DISIRIBUTION	FIRAST CONFERENCE	SECOND CONFERENCE	THIRD CONFERENCE	1993 TOTAL GATE SHARE	1993 TOTAL T.V. SHARE	1993 TOTALS
SAN MIGUEL	P2,188,856.68	1,566,933.34	1,954,633.58	5,710,423.60	8,289,883.37	14,000,306.97
SWIFT	1,525,085.66	2,108,531.72	1,759,749.98	5,393,367.36	8,289,883.27	13,683,250.73
PUREFOODS	2,216,979.20	2,091,896.99	1,019,902.27	5,328,778.46	7,869,052.97	13,197,831.43
SHELL	554,296.64	1,245,830.04	405,963.23	2,206,089.91	6,317.757,34	8,523,847.25
PEPSI	577,918.73	449,703.35	1,115,558.25	2,143,180.33	6,243,493.19	8,386,673.52
ALASKA	565,365.20	1,042,245.48	480,507.84	2,088,118.52	5,822,663.01	7,910,781.53
GINEBRA	946,360.58	510,231.41	405,674.00	1,862,265.99	5,822,663.01	7,684,929.00
ST. LUCIA PRESTO	1,419,814.67	411,573.13	1,347,432.31	3,178,820.11	3,824,603.74	7,003,423.85
TOTAL	P9,994,677.36	9,426,945.46	8,489,421.46	27,911,044.28	52,480,000.00	80,391,044.28

スポーツの市場としてのマニラ

フィリピンの国家財政が良好でなく、92年度の対外債務返済額は1130億ペソで、これは国家予算の1／3近い額である。87年以降、3年連続でGNP 5 %の上昇を示したが、国内での反乱事件、火山噴火、米軍基地の撤退などで景気は低迷し、91年にはマイナス0.05%の成長となり、失業率も9.1%から13.2%と増加している。

またフィリピンの一家族の平均年収入は約6万ペソ(注9)であるが、マニラの800万近い人口は、都市としての潜在的な購買力があるといわれている。

しかし、これほど人気のあるにもかかわらず、バスケットボールに関する専門雑誌や写真、あるいは選手銘鑑などを書店等で目にすることはない。PBAは、写真や記録を満載した150ページにもおよぶAnnual Bookを毎年出版しているが、関係者の間にしか手渡されていないようである。

93年の調査時に、関係者は「われわれのファンは熱心ではあるが、そのようなものをほしいとは思っていないし、もしも発売しても買う力がない」という考えを示したが、94年度には「キャラクター商品」の販売を開始しており、販売成績は好調と語っていた。

外国人選手の参加

PBAの特色は、3シーズンの内の第1、3シーズンで外国人選手の参加を認めているところにある。前述したように、第2シーズンはAll-Phillipinoと呼ばれ、フィリピン人選手だけで試合が行われている。

外国人選手の参加の認められているシーズンでは、各チームは2人から4人の外国人選手と契約し選手登録しているが、外国人選手の参加には身長とコートでプレーできる人数に制限を設けている。

第1シーズンでは外国人選手の身長は6フィート6インチ以下で、コート上では一人しかプレーできない。第3シーズンでは、2名のプレー参加が認められるが、身長制限は6フィート2インチ以下という取り決めがなされている。

フィリピン人選手の身長をみると、ALASKAチームにおいては、最高201cm、最低は173cm、平均187cmで、SANMIGUELでは、最高196cm、最低175cm平均は188cmであった。外国人選手身長は、全てのチームを通じて最高が196cmで、最低が183cmであった。

選手の平均身長（cm）（PBA ANNUAL'92－'93より作成）

Team		Alaska	Ginebra	Presto	Purefoods	San miguel Beer	Seven-up	Shell	Swift
フィリピン選手	最高	201	196	196	196	196	196	196	206
	最低	173	175	180	173	173	172.7	175	175
	平均	187	188	189	186	186	187	187.4	188.0
外国人選手	平均	189.5	192	188	189	189.7	191.7	188.7	190.5

選手の身長が絶対的優位であるバスケットボール競技において、身長の規制はゲームの興味を左右する重要なポイントであり、PBAのこの取り決めは非常に興味のあるアイディアであるといえる。

外国人選手の参加について、the Senate Committe on Games and Amusements の議長である Webb 氏は、「外国人選手が技術を持ち込むことによってわが国の選手のレベルが向上する。また外国人選手なしではPBAは生き残れないだろう」とPBAの制限を支持している。

この考えは関係者をはじめ多くのファンの意見を反映しているものと考えられる。

外国人選手には、身長の他にNBAのスターティング・ファイブでなかったことなどの制限が加えられているが、NBAでプレーした選手はなく、FIBA[注10]やアメリカの地方チームでの選手経歴を持つ選手がほとんどである。

この外国人選手に対する身長制限は、単に得点能力の高い選手を選ばず、チームに役立つ選手を選ぶというPBAの基本方針の現れと考えられる。日本のプロ野球のように「外国人選手は勝利を左右する助人」とは考えていない。

しかし、試合における外国人選手の貢献度の高さは記録からも明らかである。たとえばPTS scored[注11]のアベレージでは、外国人選手はフィリピン選手の3倍の数字を示している。また1試合当りの得点アベレィジはフィリピン選手21.6に対して48.0（93年度最多得点者の比較）と差がみられる。

このように貢献度の高い外国人選手であるが、93年の第3シーズン、あるチームは、1試合46.5点の平均得点をあげた外国人選手との契約を4ゲーム終了時点で打ち切ってしまった。その理由をチームのコーチは“He is good but he did't fit our system.”[注12]としている。この出来事はチームプレーを第一義におくPBAの精神を象徴していると考えられる。

外国人の中でもノーマン・ブラック（Sun Miguel Beerのコーチ）、ティム・コーン（Alaskaのコーチ）、6年間選手として活躍しているShell のボビー・パークスは、PBA関係者だけではなくファンにも非常に親近感を持って迎えられている。その理由には、彼らの妻がフィリピン人であることが大きく作用しているようである。

外国人選手導入には、身長をめぐるトラブルや麻薬所持によって国外追放処分を受ける事件があったが、外国人選手加入による国内選手の締め出しや、年棒格差からの問題はあまり生じていない。PBAでは外国人選手はバスケットボールをより興味深くするプレーヤーとしてとらえているようである。

選手契約

選手の獲得はドラフト制度とフリーエジェント制度で、監督・コーチの意見を中心に決定している（ドラフトは前年の最下位チームから指名権がある米国方式を採用している)。契約内容は選手個人によって相当の違いがあるが、フィリピン人選手は複数年契約、外国国籍選手には3ケ月（1シーズン）の契約が多い。

選手はPBAとチームとの2種類の契約書にサインをする。PBAとの間の契約書は選手としての遵守事項などが記載されており、チームとのそれには報酬などの金銭的な申し合せが書かれている。ここでは入手できた2人の契約書の概要を紹介する。(なお個人的な情報であるため氏名はイニシアルとする)

1）フィリピン人R選手の契約内容

フィリピン選手の多くは複数年契約で、この選手の場合は3年間の契約を結んでいる。契約金は、42万ペソ、48万ペソ、54万ペソと年々増加する。これはインフレ等の経済状況を見込んだものかどうかは、結論できる資料は得られなかった。

契約金以外には、優勝した場合のボーナス10万ペソ、新人賞を得た場合（この選手はルーキーである）3万ペソ、練習参加手当1日に100ペソ、試合参加手当1日150ペソの支払が約束されている。

2）外国国籍K選手の契約内容

契約期間は3ケ月、ただしチームが第2ステージに勝ち残れないこと（前述試合の方式参照）が判明した時点で、契約は打ち切られることが書かれている。

月収12,000ドル、食費2,000ドル、住居、運転手付きの自家用車（1日8時間)、家族を呼び寄せる航空券（Kの場合はフィリピン・アメリカ間の往復切符)、予選では200ドル、それ以後の試合は300ドルの勝利手当、チームがセミファイナルに勝ち進んだときには6,000ドル、ファイナルに出場した場合6,000

ドル、優勝した場合には8,000ドルのボーナスが加えられることなどが契約されている。

興味あることは、外国人選手には最多得点賞獲得にではなく、最多アシスト賞や最多リバウンド賞獲得に1,000ドルのボーナス支給が約束されていることである。これは、前に述べたように、外国人選手が単なるポイント・ゲッターとしてではなく、わき役的プレーヤーとして期待されていることを示している。

契約書の内容は、選手に対してベストコンディションを保つことやチームのために働くことが求められており、それに反する場合は契約を打ち切ることなど、当然ながら、きびしい内容が盛り込まれている。

外国人の報酬については、やはり一部から批判の声がある。これに対して関係者は、収入面外国人選手よりも上回っているフィリピン人選手が7名もいることをあげて、この額の妥当性を強調している。

おわりに

プロスポーツの成立条件について、詳しく立ち入るのは今回の調査報告の目的からはなれるが、送り手としてのプロ集団と、受け手としての観衆（再生産をになう技術的に優れた選手がその中に含まれている可能性もある）の持続的相互作用なくては、たとえ多くの観客を集めることができても、一過性の「見せ物」にしか過ぎないのだということだけは述べておかねばならない。

PBAの調査を通じて、試合の形式、ベテラン選手の存在、外国人選手に対する身長制限とチームプレーの期待など、彼らはフィリピン独自のバスケットボールの運営を志向していることが明らかになった。

フィリピンにとって外来の文化であるバスケットボールがプロ集団として成立しているのは、長年にわたるその相互作用があり、それを通じて興味あるゲームの提供ができている結果であるといえる。

最後に調査に協力いただいたPBAコミッショナーMr. Emilio P. Bernardino, Jr.、ブックキーパー Mr. Ruben P. Briones、そしてPUREFOOS株式会社 Senior Vice President の Mr. Teodoro L. Dimayuga 諸氏にお礼申し上げます。（1ドル＝28フィリピン・ペソ＝103円　1993年8月現在）

（注）

(1) 大日本体育協会編『大日本体育協会史』昭和11年発行、昭和58年復刻pp821

(2) 大日本体育協会編　前掲書　pp821

(3) 極東選手権大会は1913年から1934年の間、2年毎に開催された。英語呼称“The Far Eastern Championship Games”といい、日本（東京・大阪）、フィリピン（マニラ）、支那（上海）で三国持ち回りで開催された競技会。（「スポーツ大事典」大修館より）

(4) 大日本体育協会編　前掲書　pp737

(5) コミッショナーのベルナルド氏が新聞記者のインタビューに『5年を目標に自前の体育館を買い取りたい』と答えた。'93'－94PBA Annual, pp31

(6) ベルナルド氏が第2回目の調査時に著者のインタビューに答えた。
日本では「アマチュア・ルール」「プロ・ルールあるいはNBAルール」と区別するが、「インターナショナル・ルール」「組織の名前・ルール」とするのが、一般的である。

(7) フィリピンの大学生のバスケットボールリーグ（UAAP）は8チームで構成されているが、その試合もPBAと同様の形式で行われている。この方式はチーム数の少ないフィリピン独特の試合方式と言える。

(8) Philippin's Best 1000 Coporations 1993より

(9) Family Income and Expenditures Survey, National Statistics Office 1988年

(10) FIBAは、ヨーロッパの国々と旧ユーゴ、ポーランド、スロベニア、ハンガリー、クロアチアなどの東欧、イスラエルやトルコなど中東のプロリーグを統括している団体である。各国でそれぞれリーグがあり、チームは自国選手だけで構成されているのではなく、アメリカを始め他国の選手が加入して試合を行っている。選手の契約金は、条件の違いがかなりあるが、1流選手で1シーズン10万ドルから100万ドルの間であると伝えられている。（FIBAの月刊誌Vol. 4、No. 4より）

(11) 選手評価基準の一つ。得点、アシストプレーやリバウンドプレー等をポイ

ント化して合計し試合数で割った数字。これはNBAなどには見られないPBA独特のものである。

(12) '92－'93PBA Annual Book, pp94

参考文献

アジア21世紀研究会編著（1989）2001年のアジア経済：東洋経済新報社

CAACUP（1992）Education through Sports: University of Mnila

石井米雄監修（1992）フィリピンの事典：同朋舎出版

川北稔編（1987）「非労働時間」の生活史：リブロポート

宮本勝也編（1994）アジア読本フィリピン：河出書房新社

PBA（1991）OFFICIAL RELES：PBA

PBA（1985）1984－85 PBA Annual：PBA

PBA（1986）1985－86 PBA Annual：PBA

PBA（1991）1990－91 PBA Annual：PBA

PBA（1992）1991－92 PBA Annual：PBA

PBA（1993）1992－93 PBA Annual：PBA

寺見元恵編・監訳（1992）フィリピンの大衆文化：株式会社めこん

山本鎮彦（1990）東南アジア要覧：東南アジア調査会